

学 位 請 求 論 文 要 旨

1980年代の映画共同製作という日中文化交流モデルに関する研究

－「異文化間協働階層モデル」による構造分析の視点から－

2021年7月

城西国際大学大学院 人文科学研究科

比較文化専攻

林 玥秀

長きにわたる日中間の文化交流の歴史の中でも、1980年代に始まった日中映画共同製作という文化交流モデルは、大衆芸術としての映画のビジネス面での成功を高めるだけでなく、日中両国の国民にとって、広範にわたる相互理解と友好交流を促進するという点で重要な意義を持つ。1980年代の日中映画共同製作の成功を踏まえ、日中国交正常化や日中友好条約締結の記念となる節目に日中映画共同製作は絶えることなく続いており、日中の映画会社同士の映画共同製作も盛んである。加えて、2018年の日中平和友好条約締結40周年を記念し「日本国政府と中華人民共和国政府との間の映画共同製作協定」が調印されたことは、これまでの40年間に及ぶ映画共同製作が果たしてきた役割を評価したものであり、今後とも日中間でこれを継承し発展させるべきと両国政府が表明したことにほかならない。

本論文は、日中映画共同製作の草創期に当たる1980年代の3作品、『天平の甕』(1980)、『未完の対局』(1982)、『敦煌』(1988)を対象に、独自の「異文化間協働階層モデル」(第1層から第6層)を提示したうえで、重層的かつ構造的な視点から分析を加え、各層における弛まぬ努力と協働が積み重ねの上に完成に至ったこと、そして完成した各々の映画作品が日中両国に政治的・経済的・社会的・文化的に広くかつ深い相互理解と友好交流をもたらしたことを明らかにする。これらの3作品は、あたかもホップ・ステップ・ジャンプのように一連の動きを生み出すこととなり、その結果として確立された「映画共同製作による日中両国の広範囲にわたる相互理解と友好交流のモデル」の歴史的な意義について考究する。その要点は以下の通りである。

(1) 日中両国の長きにわたる文化交流の歴史を踏まえて、双方の国民である観客が共鳴・共感できる文化的・歴史的な題材設定は十分に可能であり、映画製作における日中協働は、魅力的な歴史スペクタクル超大作映画を製作し得る潜在力を秘めている。日中映画界の人的交流と共同映画製作をさらに促進することにより、日中合わせて117億ドル(1兆2,349億円、中国9,816億円+日本2,533億円)とされる巨大な映画市場において、新しい才能が躍動する機会を増やし、新しい活力と新しい価値を持続的に創出することができる。

(2) 日中映画共同製作では、全過程において日中双方が積極的に異文化間コミュニケーションと協働を図ることで、葛藤・論議・対立・妥協を通じて相互理解が促進され、認識・意見・主張・価値観にみられる相違が克服され、最終的には認識・目標・行動を共有する合意に到達できる。相互の矛盾や葛藤を乗り越えた共有知は、日中の映画市場に新風をもたらし、本国だけでは製作できない魅力的な映画作品を生み出すことができる。さらに、日中共同で製作した映画作品は、広く両国の相互理解と友好交流を促すことに繋がる。

(3) 日中映画共同製作は、両国の政府、民間団体、映画会社間の積極的な関与がなければ到底実現し得ない。そして、その成果も、これらの参画者を通じて広く拡散され

ていく。日中双方の多くの組織から最大限の支持や協力を得ることで、これらが相互に補完し合い、一国だけでは獲得できない映画共同製作ならではの相乗効果が生まれる。現在、日中映画共同製作は、中国側の政府文化部、中国電影合作制片公司、中国の映画会社、日本側の文化庁及び公益財団法人ユニジャパン、日本の映画会社が担う体制となっている。

(4) 1980年代の共同製作映画3作品は、各々がホップ・ステップ・ジャンプのような役目を果たすことで、第3作目の『敦煌』(1988)は、配給収入45億円(当年の映画配給の最高額)という規模でビジネス的成功を収めただけでなく、その高い芸術性もまた評価され、結果として650万人という観客動員数を得て一大シルクロードブームを巻き起こす。大衆芸術としての映画の共同製作は、今後もなお、日中の広範囲にわたる相互理解と友好交流の原動力となり得ることを示している。

(5) 日中映画共同製作がもたらす政治的・経済的・社会的・文化的な成果は、両国の政府・経済界・文化人・民間の間において広く認識され共有されている。その後、日中国交正常化の10周年の節目ごとに映画が共同製作されていく。2018年の日中平和友好条約締結40周年を記念して、「日本国政府と中華人民共和国政府との間の映画共同製作協定」が調印された。大衆芸術としての映画の日中共同製作は、映画ビジネスとしての成功とともに、多くの観客を動員することにより、引き続き日中の広範囲にわたる相互理解と友好交流の原動力となり得る。

以下、章ごとに本論文の主な内容をまとめる。

第1章では、日中映画共同製作のあり方を明らかにするうえで、1980年代の日中共同製作映画『天平の甞』、『未完の対局』、『敦煌』の概略を把握しつつ、共通の視座の設定を試みる。すなわち、日中映画共同製作を異文化間協働として捉え、すでに示された「協同の一般階層モデル」、及び「異文化間協働の活性化の概念モデル」に関わる研究成果を参考とし、これら3作品に共通する「異文化間協働階層モデル」の構築を試みる。第1層の「共感」は、日中両国の映画製作スタッフが単に時間と空間を共有するという物理的な意味合いではなく、これまで長い時を経て文化や歴史的背景を共有してきたという事実を象徴するキーワードである。第2層の「気づき」レベルでは、「人」、「モノ」、「場」に分けて、日中共同製作の実現に向けて多面的に「気づくこと」の意味づけをおこなう。第3層の「共有」は、共同製作の機運や可能性がさらに高まったと判断した時点で、映画化の実現に向けた構想・企画の「共有」、脚本作成の「共有」、撮影準備の「共有」を意味する。第4層では、個の主張と貢献、そして相互協力という「協働」が持つ2面性を明らかにする。第5層は、「新しい映画のあり方の探求と実現」が有効かつ相乗的に機能して活性化する段階である。第6層は、政治的・経済的・社会的・文化的という多面的な価値が創出される段階である。

第2章では、第1章で提示した日中共同製作映画(1980年代)の「異文化間協働階層モデル」に基づき、映画『天平の甞』(1980)に関わる日中文化交流の実体を、立体的に

6 層に構造化して分析する。この構造化を通して、長い歳月をかけてきた多くの人々による交流の努力と実践の積み重ねによって、日中映画共同製作は初めて成し遂げられるものであることがわかる。映画『天平の甕』は最初の日中共同製作映画であり、また新中国が外国と初めて取り組んだ映画共同製作でもある。ロケ地として初めて外国に開放された場所が多く、蘇州、揚州、上海、北京、大同雲崗、西安、海南島、桂林と広範囲に及ぶ。このロケを通じて、現場ならではの多くの問題や困難を乗り越えて完成に漕ぎつける。日本での興行収入 19.6 億円、配給収入 11 億円（邦画第 9 位）という成果は、大衆芸術として成功したことを示すとともに、映画共同製作が日中双方の広範囲にわたる相互理解と友好交流に奏功することを実証してみせた点で評価できる。この映画作品によって民間レベルでの日中友好の機運が盛り上がり、1980 年 5 月の華国鋒総理の訪日に向けてより良い社会的雰囲気醸成されたと言える。

第 3 章では、両国の千数百年にわたる囲碁の文化交流の歴史を踏まえて製作された映画『未完の対局』（1982）を分析する。最初の共同製作映画である『天平の甕』が日本側から提案されたのに対し、第 2 作目として中国側から共同製作が提案された。第 2 章と同様に、「異文化間協働階層モデル」に基づき、映画『未完の対局』（1982）に関わる日中文化交流の実体を、立体的に 6 層に構造化して分析する。日中両国の認識・主張・立場の違いを乗り越えて、中国側では李洪洲、葛康同、日本側では大野靖子、神波史男、安倍徹郎の 5 人が 2 年間にわたって脚本作成に取り組み、7 回の改編を重ねたことは、当時の日中両国の関係を象徴するとともに、「協働」の本質をよく示すと言って良い。映画『未完の対局』は、日中国交正常化回復 10 周年記念として企画されたが、日中両国の歴史認識や映画の娯楽性に対する認識の相違から双方の意見の隔たりが一気に顕在化する。それでも様々な矛盾、葛藤、困難、対立を乗り越えて映画共同製作を成し遂げたことは、その後の日中間の政治・経済・文化の交流にとって多くの貴重な経験と教訓を残したと言える。1982 年の鈴木善幸総理の訪中、1983 年の胡耀邦総書記の訪日と昭和天皇との会見、3,000 人に及ぶ日本青年訪中団の招聘、1984 年の中曽根康弘総理の訪中など、両国間の政治的な動きを支えるものとして日中映画共同製作は高く評価され、その後、日中国交正常化の 10 周年ごとの記念行事として映画の共同製作は定例化されることとなる。『天平の甕』に続いて『未完の対局』も、様々な認識・意見・立場の相違を乗り越えて大きな成功を収めたことで、爾後の日中映画共同製作が治的・経済的・社会的・文化的に大きな価値をもたらすことを改めて実証してみせたのである。その意義は大きく、第 3 作目となる映画『敦煌』への途を大きく切り拓いたと言って良い。

第 4 章では、日中共同製作映画『敦煌』（1988）を「異文化間協働階層モデル」の視点から分析し、成功への努力の積み重ねの立体的な階層性を明らかにする。併せて、日中の映画共同製作が様々な葛藤や認識・立場の違いを乗り越えて、両国の映画産業のみならず、文化的・経済的な広範囲にわたる交流の発展に寄与貢献し得ることを示す。日中間の人的往来が非常に限られ、インターネットによる情報のやり取りができなかった 1980 年代に

において、日中間の長きにわたる文化交流を背景とした映画『敦煌』は、日本で 650 万人の観客を動員して一大シルクロードブームを巻き起こし、日中間の官民にまたがる広範囲な交流を促進した。このことは、前 2 作品以上の成功として大きな意義を持つ。日本での配給収入は 45 億円に達し、映画ビジネスとしても成功しただけではなく、日本で空前のシルクロードブームを巻き起こしたことにより、さらに広範囲にわたる交流促進へと繋がる。1988 年の竹下登総理の訪中時には、敦煌と西安を訪問する契機ともなった。また、1989 年の日本アカデミー賞では、最優秀作品賞など 7 冠を獲得し、芸術作品としての水準の高さも評価されている。映画『敦煌』の共同製作という日中間の交流モデルは、長きにわたる文化交流の歴史を背景としたもので、その波及効果も非常に大きい。このことは一般的な異文化交流においてはきわめて稀有な事例であり、今後の日中間の文化的・経済的な交流において、日中映画共同製作は欠かかすことのできない貴重なモデルであることを、映画『敦煌』は如実に示してみせたと言える。

第 5 章では、「異文化間協働階層モデル」を用いて分析した 3 作品を比較検討し、その共通点と相違点を明らかにした。共通点に関して、1980 年代の 3 作品には多元的な立体的構造が存在し、政府・民間団体・映画会社という参画主体、文化交流の歴史に関わる題材、コミュニケーションと協働による相互理解と友好交流の促進が見て取れる。相違点に関して、日中から互い違いになされた共同製作の提案、日中映画共同製作の進展に伴うコミュニケーションの高質化と相互理解の深化、日中映画共同製作を促進する文化的な要因と映画文化に相違が見られる。これら 3 作品の共通点と相違点を踏まえ、定立した日中共同映画製作という文化交流が日中間の相互理解と友好交流において重要な役割を果たしたことを、「異文化間協働階層モデル」を用いて分析し、その成功要因を明らかにする。1980 年代に定まった日中映画共同製作という経済・文化交流のあり方は、日中両国の政治・経済・社会・文化の広範囲にわたる交流、関係の改善並びに友好の推進において、今後においてもなお、不可欠な要素として重要な役割を果たし得ることを論証する。また、本論文において有効性を確認した「異文化間協働階層モデル」は、異文化間協働の重層的な構造の重要性を明らかにするだけでなく、今後の日中映画共同製作の指針として、さらには様々な国々の文化交流を促進するうえでの設計構想や分析改善フレームとして役立つのではないかと考える。

論文の構成

序 章

研究背景

先行研究

研究目的

研究方法及び論文構成

第1章 1980年代における日中映画共同製作の構造化

1.1 大衆文化としての日中共同製作映画のあり方

1.1.1 日中映画共同製作の背景

1.1.2 日中共同での映画製作過程

1.1.3 日中映画共同製作の歴史

1.2 1980年代の日中共同製作映画の事例分析

1.3 異文化間協働としての日中映画共同製作の捉え方

1.4 「異文化間協働階層モデル」の構築

第2章 日中共同製作映画『天平の甕』－階層モデルの提示と分析（1）－

2.1 鑑真和上に関する日中仏教交流史（第1層）

2.1.1 1,200年に及ぶ日中の仏教交流

2.1.2 国境を越える多くの「場」での文化交流の実践

2.2 日中映画人がもたらした気づき（第2層）

2.2.1 1970年代以前における日中映画人交流の足跡

2.2.2 日中間の映画を通じての相互の文化受容

2.2.3 増大する日中映画交流に対する希求

2.3 共有意識の形成（第3層）

2.3.1 映画化の願望から構想・企画へ

2.3.2 史実から脚本作成まで

2.3.3 初めての中国でのロケハン

2.4 日本側の主導・中国側の全面協力（第4層）

2.4.1 日本側の撮影チームと中国側の工作组

2.4.2 各地ロケにおける最大の支援

2.5 共通認知の探求と可視化による相乗効果（第5層）

2.5.1 歴史や異文化に対する共通認知の形成

2.5.2 リアルな再現と異文化要素の添加

2.6 共同映画製作による創出価値（第6層）

2.6.1 政界から民衆レベルの幅広い交流促進と産業振興

2.6.2 人の往来・文化交流の新たな枠組みと価値創造

2.7 最初の日中共同製作映画『天平の甕』の構造

- 2.7.1 最初の日中共同製作映画にみる重層構造
- 2.7.2 日中共同製作映画『天平の甍』の意味づけ

第3章 日中共同製作映画『未完の対局』－階層モデルの提示と分析(2)－

- 3.1 囲碁の伝来・交流手合の日中囲碁交流史(第1層)
 - 3.1.1 数千年に超える時間・時代の囲碁交流の蓄積
 - 3.1.2 国境を越える囲碁交流の歴史
- 3.2 日中文化交流の深化に伴う映画共同製作の再展開(第2層)
 - 3.2.1 多領域にわたる人的交流の深化
 - 3.2.2 1980年の日中映像共同製作の実現
 - 3.2.3 日中映画産業の復興と拡大の希求
- 3.3 企画・脚本・準備に関する認識の統一(第3層)
 - 3.3.1 中国側の積極的推進と日本側の受け入れ
 - 3.3.2 矛盾・衝突・妥協による脚本の共同作成
 - 3.3.3 広域に及ぶロケと一線級俳優の登用
- 3.4 撮影段階における日中双方のコミュニケーションの増加(第4層)
 - 3.4.1 日中双方の個の主張の減少と貢献
 - 3.4.2 双方の共同参画の増加
- 3.5 全過程における日中協働による新たな探求と映画効果の実現(第5層)
 - 3.5.1 認識・やり方・文化の相違を乗り越える共通認知の形成
 - 3.5.2 日中双方の強みの発揮と連携による相乗効果の実現
- 3.6 政治的・経済的・社会的・文化的価値の創出(第6層)
 - 3.6.1 「文化外交」の役割と映画産業の振興
 - 3.6.2 日中共通文化としての“囲碁ブーム”と相互理解の促進
- 3.7 映画『未完の対局』の深化した階層的構造
 - 3.7.1 映画『未完の対局』の重層的構造
 - 3.7.2 日中共同製作映画『未完の対局』の意味づけ

第4章 日中共同製作映画『敦煌』－階層モデルの提示と分析(3)－

- 4.1 シルクロード経由による多民族・多文化・多宗教の東西交流史(第1層)
 - 4.1.1 東西文化交流史におけるシルクロードの重要性
 - 4.1.2 敦煌の歴史的な位置づけと「敦煌学」への関心
- 4.2 複合的に掘り下げた共同製作の可能性に対する希求(第2層)
 - 4.2.1 継続してきた映画関係者の交流
 - 4.2.2 映画作品の新たな階層的交流
 - 4.2.3 高品質の製作活動に対する期待
- 4.3 共同製作の基礎となる情報・認識の共有(第3層)
 - 4.3.1 徳間康快の長年にわたる構想の実現

- 4.3.2 日本側の脚本作成と中国側の歴史認識
- 4.3.3 撮影に備えた中国側の大動員
- 4.4 ゴビ砂漠や莫高窟での撮影という挑戦（第4層）
 - 4.4.1 中国政府の全面協力と日本側の実行力
 - 4.4.2 参加・協力意識から協働意識への止揚
- 4.5 歴史認識と娯楽性の探求－西域風景・東西文化交流の歴史的再現（第5層）
 - 4.5.1 共同製作の経験を踏まえた双方向的コミュニケーション
 - 4.5.2 新たな歴史スペクタクル映画作品の成功
- 4.6 『敦煌』による政治的・経済的・社会的・文化的価値の創出（第6層）
 - 4.6.1 日本政府の支援と巨額の経済収益
 - 4.6.2 敦煌文化財の保護ブームと映画文化の相互作用
- 4.7 時間・空間を超える異文化と自国文化の探求
 - 4.7.1 日中共同製作映画『敦煌』の重層的構造
 - 4.7.2 日中共同製作映画『敦煌』の意味づけ

第5章 1980年代の日中映画共同製作が切り拓いた多面的交流

- 5.1 日中文化交流を題材とする多元的な立体構造
 - 5.1.1 政府・民間団体・映画会社の主体的参画
 - 5.1.2 仏教・囲碁・シルクロードの文化交流の歴史の題材
 - 5.1.3 協働による相互理解と友好交流の促進
 - 5.1.4 政治的・経済的・社会的・文化的価値創出の成果
- 5.2 日中映画共同製作に伴う協働の深化
 - 5.2.1 共同製作の相互的な提案
 - 5.2.2 経験の蓄積に伴うコミュニケーションと相互理解の深化
 - 5.2.3 文化的にみた日中間の共通性と相違性
- 5.3 日中共同製作映画による広範な友好交流モデルの構築
 - 5.3.1 日中映画共同製作の継続的な取り組み
 - 5.3.2 日中映画共同製作に対する支援体制
 - 5.3.3 日中共同映画製作による友好交流モデルの有効性
 - 5.3.4 日中映画共同製作モデルの将来的発展性

終章

参考文献